腐敗した権力と成熟した国民：コスタリカ 2014 年大統領選挙

山口 知也

はじめに

コスタリカ人は、自国の成熟した民主主義に誇りを持っており、選挙を「民主主義の祭典」と呼ぶ。彼らは、選挙の日は家族そろって出かけ、支持する政党の旗を振り、リズムに乗って楽しそうに政治フレーズを連呼しながら投票所に赴き、投票所では隣人達と和やかに会話を交わす。投票後はまた楽しそうに家に帰り、テレビが1日中生中継する投票風景を見ながら昼食をとり、「民主主義の祭典」を家族で祝う。この日常が半世紀以上も繰り返された結果、コスタリカは中米における民主主義の優等生となった。1949 年の現行憲法発布以降、国民解放党（PLN）とキリスト教社会統一党（PUSC）の二大政党による平穏な政権交代が繰り返され、国民は安定した政治の下で一定の経済的繁栄と手厚い社会保障を享受してきたのである。また、コスタリカ国民は権力の継続を嫌い、憲法で大統領や国会議員の連続再選が禁止されている他、慣行として、現行憲法下で同一政党が三期連続で政権を担ったことがない。これらに加えて、豊かな自然に恵まれ、軍隊のない平和国家であるコスタリカは[1]、しばしば「世界一幸せな国」とも言われてきた[2]。

しかし、このコスタリカ的民主主義を支えてきた政治体制が 21 世紀に入ると劣化し、めまぐるしい変化を見せ始めた。まず 2000 年代、二大政党の一翼を担ってきた PUSC が、相次ぐ元大統領の汚職事案で国民の信頼を失い没落した。次に、06 年以降 8 年間は PLN が二期連続して政権を担い、PLN 一強時代が築かれたが、PLN 政権でもやはり汚職事案が多発し、国民の政治不信を招いた。

2014 年 2 月 2 日（第一回投票）及び 4 月 6 日（決選投票）に実施された大統領選挙では、市民行動党（PAC）という、2000 年に生まれた新しい政党の候補であるルイス・ギジェルモ・ソリスが勝利し、半世紀以上続いた二大政党制は終焉を迎えた。ソリスは選挙戦終盤になるまで無名のダークホースだったが、国民は新しい政党、無名の新しい政治家に、劣化した政治を改善するための「変化」を期待したのである。国民が望んだこの「変化」への希望は、如何にして無名候補ソリスに収斂したのであろうか。キーワードは、成熟したコスタリカ的民主主義、腐敗した権力への反発、揮発性の高い無党派層の増加である。

ソリス新大統領と家族（子供６人！）。コスタリカでは家族が何より大切。（市民行動党広報部提供）

選挙戦の構図

21 世紀に入ってからのコスタリカ政治は、全国規模の圧倒的な組織力を有する PLN を中心に回り、今次選挙戦も「PLN か否か」が国民にとって第一の選択であった。しかし、PLN 陣営は近年の相次ぐ汚職スキャンダルと、チンチージャ前政権の歴史的不人気という荷物を抱えていた上、大統領候補となったジョニー・アラヤ前サンホセ市長は、テーブルの下での不透明な交渉を得意とする、古い政治を象徴する人物であった。その結果、「PLN か否か」という選択は「古い政治の継続か変化か」に置き換えられ、圧倒的組織力があるとは言え、PLN には難しい選挙となった。さらに、伝統的な二大政党制が崩れていく中で、特に都市部や若者を中心に揮発性の高い無党派層が増加してきた。このような情勢下、今次選挙戦は組織力を持つアラヤ PLN

候補を中心に展開しながら、「PLN か否か」、「PLN でなければ誰か」が争点となっていったのでる。その中で、長年大学教授を務め、主要な政治ポストの経験がなかったソリスは、選挙戦の終盤まで地味な無名候補であり続けた。

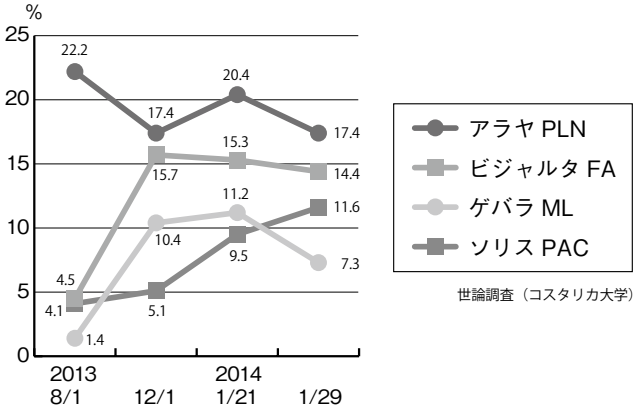
選挙戦の展開

選挙戦を通してアラヤの対抗軸となったのは、左派政党である広域戦線（FA）のホセ・マリア・ビジャルタ候補だった。ビジャルタは、若さ（36 歳）、鋭い弁舌、弱者に寄り添う姿勢を見せることで、清廉で新鮮な政治家の印象を与え、反 PLN の支持を集めた。しかし、これまで中道の二大政党が政治を担ってきたコスタリカにおいて、左派政党の台頭は新鮮ではあるが劇薬でもあった。ビジャルタの左派思想に対して、国のベネズエラ化を恐れる経済界やマスコミと PLN が結託し、コスタリカではアレルギーが非常に強い「共産主義者、チャベス主義者」のレッテルがビジャルタに貼られ、ビジャルタは終盤戦に失速した。もう一人の対抗馬として注目されたのは、逆に右派を代表する自由運動党（ML）のオット・ゲバラ候補だった。ゲバラは 4 回目の大統領選挑戦で知名度も高く、俳優のような派手な容姿を持つこともあり、メディアの注目を集めた。しかし、ゲバラ候補も、基幹産業の民営化や徹底的な規制緩和等の過激なリバタリアン政策を掲げたことで、一定の支持は得られても大多数を動かすほどにはならなかった。派手な言動で注目された二人だったが、成熟した民主主義の定着により中庸を好むコスタリカ人は、極端な左右の主張は受け入れなかったのである。

この 3 人の陰に隠れて忘れられた候補だったソリスは、投票まで 1 ヶ月を切った終盤になりようやく注目され始める。投票前の 1 ヶ月間、テレビ・ラジオで合計 10 回以上も候補者討論会が実施され、ソリスはそこで、透明性と倫理を訴えるぶれない主張、変化を目指すが穏健な政策、他候補を攻撃しない融和的な姿勢、正直さ（事実と異なる情報を発言してしまった次の討論会でこれを謝罪していた）、政策への理解度の高さ、中産階級出身の親しみやすい人間性などを効果的に訴え、自身のイメージを押し上げた。更にソリスは、SNS を巧みに使い、特に若年層に効果的に訴えた[3]。各種世論調査では、投票まで 1 ヶ月を切っても投票態度未定層（無党派層）が非常に多かったが、ソリスの台頭を見てこの無党派層が動き出した。ソリスへの投票こそが打倒 PLN への最善の道と判断し、ソリス支持の動きが SNS を中心に一気に広まり、ソリスに強い「風」が吹いたのである。この揮発性の高い無党派層は投票態度を明らかにしないために、世論調査結果に現れにくいが、その多くが反 PLN と見られており、これが今次選挙戦の鍵を握っていたのである（表 1 参照）。この結果、2 月 2 日に行われた第一回投票において、ダークホース的存在だったソリスが 31％の得票率で驚きの一位となり、本命だったアラヤが 29％の二位に沈んだのである[4]。地域別の投票結果を見ると、ソリスは、都市部で無党派層が起こした「風」により圧倒的な強さを見せたが、地方では三位にも入れない地区もあった。逆にアラヤは地方の強固な組織票に支えられた結果となった。

第一回投票で勝利できなかったアラヤには、もはや決選投票での勝利の可能性はなくなっていた。アラヤ以外への票はすべて「変化」を求める反 PLN 票であり、しかも穏健候補であるソリスは、反 PLN 票を集めるのに最適な候補だったからである。勝ち目のなくなった

表 1　2014 年コスタリカ大統領選挙　各候補支持率の推移



世論調査（コスタリカ大学）

朝市で市民と談笑する庶民派のソリス大統領。
（Ana Karen Cortez 提供）

アラヤは、決選投票の1ヶ月前に、途中で選挙戦を撤退するという前代未聞の対応をとり[5]、事実上ソリスの勝利が確定した中で、ソリスの信任投票とも呼ぶべき決選投票が行われた。その結果ソリスは、78%という史上最高の得票率で圧勝したのである。

今後の展望

昨今のコスタリカでは、安定した二大政党制の下で確立されてきた高福祉モデル（無償の公共医療と公共教育、手厚い年金制度、公共セクターを中心とした安定した雇用）への信頼が低下し、国民は生活に漠然とした不安を感じている。今次選挙においても、これらのテーマは幾度となく議論され、国民は不安を安心に変えるための何らかの「変化」を求めたのである。また国民は、この高福祉モデル不安定化の原因は、腐敗した権力や不透明な政治にあるとみなし、古い政治家達を退場させたのである。但し、国民が求める「変化」は、単なる「為政者の交代」なのか、それとも「発展モデルそのものの変化」なのかは現時点で定かではない。ソリス自身がそれを自覚しており、アラヤ撤退後は国内のあらゆるセクターと対話し、国民が求める変化の中身を明確化しようと努めている。

他方で、ソリスがこの変化の中身を吟味する時間はそれほど残されていない。ソリス大統領は、130万票（得票率78%）というコスタリカ史上最多の票を得て、強力な正統性をもって政権をスタートさせた。しかし、それは裏を返せば、国民の強すぎる期待を背負ってしまったことになる。政権交代、二大政党制の終焉、初のPAC政権等、ソリスの勝利には多くの歴史的意義が付随しており、国民はソリス政権に新しい時代の到来を期待している。ソリスは、この強い正統性を背景に、目に見える「変化」を国民に早い段階で見せる必要がある。なぜなら、ソリスが選挙で獲得した票は、PACの組織票ではなく揮発性の高い無党派票であり、風向きが変われば一気に支持を失うリスクを孕んでいるからである。

ソリス新大統領が大統領府に初めて登庁した5月9日、最初に実行した「変化」は、大統領府の周りを囲む生け垣の剪定だった。外から見やすくし、大統領府の「透明性」を高めるためである。これが、コスタリカに真の変化をもたらす第一歩なのか、それとも単なるパフォーマンスに終わるのか。成熟した民主主義を持ち、世界一幸福な国民は、家族と一緒にその行方を注視している。

（本稿は、著者個人の見解に基づくものであり、著者が所属する機関の立場や見解を代表するものではない）

（やまぐち　ともや　在コスタリカ日本大使館一等書記官）

1　1948年の内戦を経て、49年に制定された憲法で常設軍の保持が禁止された。

2　09年にNYタイムズが行った世界幸福指数調査でコスタリカは1位になった。

3　コスタリカでは、国民の50％以上、若年層に限っては90％以上がSNSを活用しているとの調査結果がある。主にFacebookとTwitter。

4　コスタリカ大統領選では、第一回投票で40%以上の得票率を獲得した候補がいない場合、上位二人による決選投票になる。

5　コスタリカ憲法上、大統領候補は選挙戦途中に立候補を辞退できないため、アラヤは選挙キャンペーンの中断という事実上の撤退を行った。